

相模原市立博物館活動評価書

(評価期間：平成 26 年度～平成 28 年度)

平成 3 0 年 3 月

相模原市立博物館

【目次】

相模原市立博物館活動評価の総括 (評価期間：平成26年度～平成28年度)	1
博物館の活動評価に到るこれまでの経緯	4
相模原市立博物館活動評価	
事業評価シート(定量評価)	6
事業評価シート(定性評価)	8

相模原市立博物館活動評価の総括 (評価期間：平成26年度～平成28年度)

平成20年6月に「博物館法」が改正され、博物館の運営状況の評価やその情報の提供等を行うこととされた。このため当館では、当館の使命及び重点目標等に基づき、定量評価及び定性評価の手法で、博物館協議会委員による有識者評価を経て、平成23年度～25年度評価に引き続き、第2回目となる平成26年度から平成28年度までの活動について点検・評価を行った。

【当館の使命】

地域の歴史や文化・自然に関する資料を調査研究し、また、収集した資料を適切に保存し蓄積するとともに、その活用を図りながら地域文化を継承・発信する拠点となること
主体的に参加した市民と協働し、あるいは地域の諸機関と広く連携していく体制を整え、市民文化の向上に資する活動を積極的に展開すること

【評価項目】

- 1 常設展示のリニューアルと宇宙教育普及事業の推進
- 2 関連施設・機関との連携
- 3 市民との協働による博物館活動の展開
- 4 博物館の基礎的な機能を果たすために必要な活動

平成26年度～平成28年度における活動評価全体総括

市民とともに歩む博物館として、引き続き、地域に根差した活動を活発に行っている点が有識者会議において評価された。

具体的には、JAXAと連携した多彩な宇宙教育普及事業の実施をはじめ、常設展示のリニューアルとして市民目線による展示の検討を継続的に行っている点、小学校をはじめとする学校への学習支援や、公民館等の事業の実施に対しての連携、博物館を舞台とする各分野でのボランティアとの協働による活動の充実などである。

一方、博物館でのイベント等は積極的に行っているが、入館者数は頭打ちの傾向が見られ、また、利用する年代層にやや偏りが見られるなど、市民にとって一層の魅力ある活動の展開や、事業の広範な周知方法についての指摘がなされた。

こうした評価を真摯に受け止め、今後とも改善を積み重ねながら、さらに地域文化を継承・発信する拠点としての博物館を目指して活動していく。

【定量評価】

定量評価(6~7ページ)は、事業評価シート(定量評価)のとおり、目標を上回る、あるいはそれに近い数値を達成している項目が多く、この点は評価されるが28年度には入館者が5%減少となるなど、より魅力ある事業の展開や積極的な周知など、今後のさらなる充実が必要である。

課題として、上記の点に加え、定量的評価の数値の推移を館全体の活動内容に位置付けて分析することや、学芸員が館外で行った事業の参加数を加えるなど、多面的な方向からさらに定量評価を検討する必要がある。

【定性評価】

定性評価(8ページ以降)は、今回の評価書作成にあたり、直近の平成28年度の活動状況に対する評価を中心に記載しており、各項目については、以下のとおり総括した。

- 1 常設展示のリニューアルと宇宙教育普及事業(8~10ページ)では、「市民による常設展示の検討」「各種宇宙教育普及事業の展開」について評価を行った。

有識者意見からは、市民による常設展示の展示替えを目的とした検討会が結成され、市民目線による展示の検討が引き続き行われている点や、国際的にも知名度の高い機関であるJAXAと連携した多彩な活動が、積極的に行われている点が評価された。

課題として、市民から提出されるさまざまな意見を適切に反映させ、さらに博物館への期待度を上げることや、宇宙教育普及事業に参加した市民の評価を元に、をさらにJAXAとの連携を発展させることが挙げられる。

- 2 関連施設・機関との連携(10~13ページ)では、「博物館ネットワーク計画の推進」「学校への学習支援」「公民館等との連携」について評価を行った。

有識者意見からは、津久井地域にある施設の利用者が市民協働による事業によって増加した点や、全体として小学校を中心とした授業等への支援が積極的行われ、そのほかにも、公民館等の事業実施に対しての協働が積極的になされている点が高く評価された。

課題として、津久井地域の施設の周知が未だ不十分であることや、今後ともさまざまな取り組みによる学習支援の展開、博物館職員以外の外部の研究者やボランティアとの連携による活動の展開について検討していく必要がある。

- 3 市民との協働による博物館活動の展開(14~15ページ)では、「市民の会の活動の展開」「市民学芸員の活動の展開」について評価を行った。

有識者意見からは、引き続き博物館に拠点を置く市民の会による活動が実施され、運営の軸の一つとなっている点や、特に市民学芸員による主体性を重視した活動のあり方が高く評価された。

課題として、会に参加する者が高齢化・固定化して人材の確保が難しくなっている点や、そうした博物館で活動する多くのボランティアの存在や活動を周知することがあり、さらに、さまざまな市民による活動内容の役割をこの機会に博物館側として整理することが必要である。

4 博物館の基礎的な機能を果たすために必要な活動(16 ページ)では、「市民とともに実施する資料整理及び展示、調査成果の公表」について評価を行った。

有識者意見からは、市民の会を中心に数多くの資料採集や整理が市民協働によって行われ、また、市民による調査研究の成果が『研究報告』に掲載されていることが評価された。

課題として、こうした市民による資料整理の成果を蓄積して周知していくことや、さらに多くの市民が参加できるような調査を企画・実施していくことが挙げられる。

最後に、今回は**今後の評価の手法や評価シート全般に係わる有識者評価(17 ページ)**も実施した。

この点に関しては、博物館として達成できなかった内容の記載や、定量評価に際して妥当な目標値の設定と目標を達成する手法の検討・評価、社会のIT化への多様な面からの対処、館の特徴の改めての明示化など、多様な方面からの評価がなされた。

博物館の活動評価に到るこれまでの経緯

平成 20 年 6 月 博物館法改正

博物館法条文

(運営の状況に関する評価等)

第九条 博物館は、当該博物館の運営の状況について評価を行うとともに、その結果に基づき博物館の運営の改善を図るため必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

(運営の状況に関する情報の提供)

第九条の二 博物館は、当該博物館の事業に関する地域住民その他の関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため、当該博物館の運営の状況に関する情報を積極的に提供するよう努めなければならない。

平成 21 年 12 月 第 8 期博物館協議会へ「活動状況に関する評価計画の策定」を諮問

第 8 期博物館協議会 (任期 : 平成 21 年 11 月 20 日 ~ 平成 23 年 11 月 19 日) において、博物館評価の先進事例や当館のこれまでの活動状況をもとに、評価のあり方について検討が行われた。

平成 23 年 11 月 第 8 期博物館協議会による答申「活動状況に関する評価計画の策定」

評価のあり方について答申されるとともに、相模原市立博物館の使命として次のとおり定められた。

地域の歴史や文化・自然に関する資料を調査研究し、また、収集した資料を適切に保存し蓄積するとともに、その活用を図りながら地域文化を継承・発信する拠点となること

主体的に参加した市民と協働し、あるいは地域の諸機関と広く連携していく体制を整え、市民文化の向上に資する活動を積極的に展開すること

また、重点課題として次の項目が挙げられた。

常設展示のリニューアルと博物館ネットワーク計画の推進

関連施設・機関との連携

市民との協働による博物館活動の展開

平成 24 年 2 月 第 9 期博物館協議会に諮問「活動状況に関する評価計画の策定」について

第 9 期博物館協議会 (任期 : 平成 23 年 11 月 20 日 ~ 平成 25 年 11 月 19 日) において評価計画及び具体的な評価の手法について検討を行った。

平成 25 年 11 月 第 9 期博物館協議会答申「博物館の活動状況に関する評価について」

同答申において、具体的な実施方法について次のとおり策定された。

定性的評価と定量的評価を組み合わせで行う。

定量的評価は、博物館における一般的な数値である入館者数ばかりでなく、特に当館の重点課題の一つである市民協働に資する活動等に係わる数値について、目標値を設定した上で実施する。

定性的評価は博物館の使命を達成するための当面の重点課題に対して行う。

実施の手順に際しては、重点課題を達成するために実施する事業について、まず館内部での企画内容とそれへの達成度に対しての自己評価を行い、それに対しての利用者・参加者側の評価をアンケート等の結果を基に示し、その上で**博物館協議会による有識者評価**を行って、全体的な評価としてまとめる。なお、協議会による評価は、会議の開催日程等、時間的な制約もあるため、効率的な実施に務める。

平成 25 年 11 月 第 10 期博物館協議会による有識者評価開始

第 10 期博物館協議会（任期：平成 25 年 11 月 20 日～平成 27 年 11 月 19 日）において、新・相模原市総合計画前期実施計画期間である平成 23 年度から平成 25 年度までの博物館の活動評価について、有識者評価を実施した。同時に、利用者統計や来館者アンケート、ボランティアによる評価等など、評価全体の方向性について検討を行った。

平成 26 年 11 月 平成 23 年度から平成 25 年度までの活動評価を作成

平成 27 年 3 月 相模原市教育委員会定例会議にて報告

平成 27 年 11 月 第 11 期博物館協議会による有識者評価開始

第 11 期博物館協議会（任期：平成 27 年 11 月 20 日～平成 29 年 11 月 19 日）において、新・相模原市総合計画中期実施計画期間である平成 26 年度から平成 28 年度までの博物館の活動評価について、有識者評価を実施した。同時に、今後の評価の手法について検討を行った。

常設展示のリニューアルと宇宙教育普及事業の展開

関連施設・機関との連携

市民との協働による博物館活動の展開

博物館の基礎的な機能を果たすために必要な活動

平成 29 年 11 月 平成 26 年度から平成 28 年度までの活動評価を作成

平成 30 年 3 月 相模原市教育委員会定例会議にて報告

平成28年度事業評価シート(定量評価)

項目	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度 【前年比】	28年度 (目標)
入館者数	137,608	138,619	138,660	126,631	132,201	125,194 【94.47%】	140,000
プラネタリウム観覧者	61,648	55,377	55,905	51,816	53,432	54,814 【102.59%】	55,000
講座・講演会参加者	10,721	11,328	12,483	13,342	11,799	13,782 【116.81%】	12,000
講座・講演会数(延べ回数)	24(109)	37(105)	36(124)	38(118)	34(102)	38(106)	40(110)
職員派遣(外部講師)数	56	54	58	69	82	80 【97.56%】	80
市民の会数(登録者数)	9(181)	10(228)	12(228)	14(295)	13(256)	12(284)	12(270)
市民の会延べ参加者数	2,305	2,147	2,559	2,886	2,389	2,487 【104.10%】	2,500
ホームページアクセス数			110,391	132,404	531,126	614,107 【115.62%】	580,000

- ・ には星空観望会の参加人数を含む。
- ・ のホームページアクセス数は23～24年度の単年度数値無し

、 に関して

前回の評価を行った25年度以降、21年度から13万人後半を記録していた入館者数が前年度比で5%ほど減少し、13万人を割り込んでいる。28年度の前年度比では、企画展等が約3,500名減、プラネタリウムは一般投影3,500名増、全天周映画が2,500名減となっている。

～ に関して

講座・講演会の参加者は年によって変動するが毎年1万人以上となり、特に28年度は前年に比べて一割以上の増加となった。回数は例年と同程度であるが、いくつかの講座等で連続するものが実施されている。また、職員派遣数は27年度から大きく伸び、依頼に基づく活発な派遣が行われている。

、 に関して

市民の会は、市との協働事業提案制度で採択された団体が、三年間の継続期間が終了したため減少しているが、それらの会とは現在も協働で活動する形態となっている。これらの団体は、登録者には含んでおらず、事業に従事した人数は表に挙げたものより多い。市民の会へは活発な活動を行っているが、参加延べ人数はほぼ同じようなものとなっている。

に関して

27年度が前年度より相当増えているのは、ホームページのリニューアルに伴い、アクセス数のカウント方法が変更になったためである。それでも28年度は前年度に比べて約83,000件ほど増加しており、広報媒体としてのホームページの位置は重要なものとなっている。ホームページのアクセス数をどのように位置付けるかという点については、今後とも引き続き、検討していくことが必要である。

全体を通して

・総じて、多くの項目の数値が安定し、あるいは講座・講演会参加者など前回の評価の際よりも大きく数値を伸ばしている項目があるのに対して、入館者が減少する動向となっている。これは22年度の「はやぶさ」カプセルや25年度の「はやぶさ」が持ち帰った微粒子公開など、言わば「はやぶさ」効果が時間の経過とともに落ち着きつつある傾向を示している。今後とも天文関係の展示やプラネタリウム番組など、JAXAとの連携に拠る活動の展開はもちろんだが、そればかりでなく、それぞれの分野の蓄積に基づく魅力ある展示や普及活動等を企画・実施することが重要である。

・例年の入館者数の推移から見ると、今後も大幅な伸びを見込むことを期待するのは難しいことが想定される。しかし、博物館の設置目的や果すべき使命からすると、講座・講演会参加者数や職員派遣等の推移は意味あるものと捉えられ、今後とも全体の入館者数はもとより、こうした面での数値の推移を重視していくことで、館全体の活動内容をより適切に評価できるようになると思われる。

・数値的な評価では、他館との比較も一つの指標となるので、そうした検討も必要と言える。その場合、他館では入館者だけでなく、例えば学芸員が派遣先で行った講座等の参加者数も利用者として含めている場合もあり、博物館全体の活動を捉える点では重要な数値と位置付けられる。その意味で、今後は全体の利用者数も掲載することが求められる。

平成 28 年度事業評価シート（定性評価）

1 常設展示のリニューアルと宇宙教育普及事業の推進

1-1 市民による常設展示の検討

実施内容及び自己評価

- ・自然・歴史展示室の3テーマ「くらしの姿」において、長年、他館から借用していた資料を返却し、新たな視点のもとに展示を構成することを目的に結成された「展示替え検討会」では、平成 25 年度末から本格的に検討を開始し、当初の目標通り 27 年 11 月には展示替えを完成した。検討会では、参加者がただ意見を言うのではなく、従来までの展示内容についての理解を深めつつ、新たな展示構成と狙いを学芸員と市民がともに検討して内容を決定した上で、これまでの資料の撤収と列品等の実際の作業も参加者が行った。この検討会では、「くらしの姿」コーナーの展示替えで終了するのではなく、引き続き 28 年度は展示替えをした内容と関連付けて養蚕に関連するミニ展示（「市内の最後の養蚕」「養蚕の信仰」「描かれた養蚕」）を自然・歴史展示室内で3回実施した。
- ・展示替えとは別に、自然・歴史展示室内の経年によって古くなった解説パネルやキャプションを新しくすることを目的に活動するグループがあり、27 年度は、2 テーマ「郷土の歴史」の中世、28 年度は近世～近代のコーナーの作成を行った。さらに、自然・歴史展示室の各コーナー及び天文展示室に簡単なクイズを設置するグループもあり、数か月ごとに定期的な設問を入れ替えている。いずれのグループも市民同士で意見を出し合い、担当学芸員と内容を検討しながら進めており、29 年度以降も継続して実施していく予定となっている。
- ・さまざまなミニ展示を実施し、さらにクイズを設置することで、常設展示に少しでも変化を与えるとともに、一般来館者が展示をより興味深く見学し、あるいは楽しみながら知識を得る機会を提供することができた。
- ・市民とともに解説やキャプションを改めて見直すことで、展示内容をより分かりやすく改善することができた。

利用者意見（検討会に参加している方からの意見）

- ・作業の方向性として、展示替えでは内容的に一般市民がより関心を持っている事象を取り上げ、解説パネルやキャプションでは市民目線を重視し、分かりにくいものを検討して改善する、クイズの設問では、子どもでも取り組みやすく、展示資料をよく見ることで答えが分かるような問題を工夫するようにしている等の意見が出されている。
- ・これらの作業に参加されている方々は、ほとんどが市民学芸員等の他の活動にも係わっており、具体的な展示に係わる諸作業も担当することで一層視野が広がるとともに、相互の関連のもとに諸活動に取り組むことができる。

有識者評価

- ・常設展示の展示替えやミニ展、クイズ設置、キャプションの作成など、さまざまな点について市民が関わり検討するという姿勢は、当館が市民にとって身近な博物館であることを示しており、とても良い取組みとして評価できる。実際、市民目線による解説パネルやキャプションの改善は見やすく、分かりやすいものとなっている。今後とも、学んだり知ったりする楽しみを感じられ、また、触ったり体験できたりする展示について市民とともに考えていくことが重要である。

- ・市民と学芸員が展示について議論をすることは、学芸員にとっては市民のニーズを理解し、市民にとっては博物館や学芸員の考えに触れ学ぶことができるものである。こうした観点からも貴重な機会であり、今後とも継続していくことが求められる。
- ・今後の展開として、一概に「市民」と言っても小学生から高齢者まで幅広く、例えば説明文の大きさや掲示場所などさまざまな検討すべき点があり、こうしたものが来館者の満足度形成にも影響していく。引き続き、多様な検討が必要であるとともに、さらには、「わかりやすい」教育的な効果とともに、「ドキドキ感」や「わくわく感」をどのように醸成していくか、といった点も市民とともに考えていって欲しい。

1 常設展示のリニューアルと宇宙教育普及事業の推進

1-2 各種宇宙教育普及事業の展開

実施内容及び自己評価

- ・JAXAと連携し、夏季企画展「JAXA×博物館「宇宙とつながる」写真展」を実施し、美しく幻想的な宇宙の姿を写真パネルなどで紹介した（延べ観覧者 21,727 名）。
- ・「はやぶさ」が帰還した日(6月13日)を記念し、6月4日(土)～12(日)の間に「はやぶさウィーク」として「はやぶさ」「はやぶさ2」関連のプラネタリウムと全天周映画を上映した。また、6月12日は、「はやぶさトークライブ」を実施するとともにプラネタリウムで特別に第5回目を上映し、JAXA研究開発員によるミニ解説も行った（延べ観覧者 1,028 名）。
- ・「宇宙フェスタさがみはら2016 - 生命の可能性を探る」(11月23日実施)や中央地区自治会連合会等との共催事業「第2回中央地区「子どもと大人 共に学ぶ宇宙教室」、相模原市民文化財団との共催事業「かんじる学校 特別編 星空えほん会」などの事業を実施し、JAXAだけでなく自治会や市関係団体、民間企業と連携した事業を展開した。
- ・毎月実施している「さがみはら宇宙の日」では、偶数月に現在小惑星リュウグウを目指して宇宙を航行している小惑星探査機「はやぶさ2」のプロジェクトチームによる講演(はやぶさ2トークライブ)を実施し、他にもJAXA関係者の講演やワークショップなどを実施した(「さがみはら宇宙の日」延べ参加者 3,101 名)。
- ・夏季企画展示、講演会、オリジナルプラネタリム番組の作成など、JAXAとの多くの連携事業の実施により、気軽に観覧できる内容から高度なものまで、さまざまなレベルで最新情報などを提供し、宇宙や天文に関する興味関心を深めることができた。また、自治会等との連携事業により、地域に向けた宇宙教育普及事業について貢献するとともに、幅広い年齢層の来館者を得ることができた。
- ・「はやぶさ」に関連した事業を実施し、JAXA相模原キャンパスがある相模原市が「はやぶさ」のふるさとであることを周知することでシティセールスに貢献した。
- ・プラネタリム事業は民間活力の導入を行い、夏休み番組チラシの全小学生への配布、プラネタリウムコンサート、無料番組の投影、スケールメリットを生かした番組選定等の各種提案事業を実施した。その効果により、リピーターに加えて新たなる来館者を掘り起こし、観覧者数前年度比 103%、観覧料前年比 102%というように、観覧者数や観覧料の増加につなげることができた。

利用者意見
<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートでは、企画展はJAXAと連携を行っているという利点を生かした数々のJAXA 所有の資料を展示している点や美しい写真の数々が評価された。 ・はやぶさ2トークライブをはじめとする各種講演会では「宇宙の奥深さを感じた」「現場での記録や体験などを聞けるのは非常にありがたい」などといった好意的な意見が寄せられていると同時に、講演内容や講演の難易度等について多種多様な要望がでている。
有識者評価
<ul style="list-style-type: none"> ・JAXAと連携できる点是他館にはない特徴であり、その多彩な関連事業は当館に対する市民の認知度を高め、集客面でも貢献しているとともに、市内だけでなく世界に向けての発信も行われている。さらに、弥栄高校や桜美林大学などをはじめ、そのほかの諸団体とも連携した宇宙教育普及事業を発展的に実施し、非常に活発な活動をしている点は評価でき、今後とも継続していくことが望ましい。 ・JAXAとの連携展示に際しては、内容や解説等の来館者からの評価を博物館とともにJAXAにもフィードバックし、次回以降の展示に生かしていくことが重要である。また、JAXA 職員の講演などインターネットでの配信も行われているが、録画してDVDでのライブラリー化などの検討も考えられる。 ・宇宙教育普及事業以外にも人文系の各種事業のダイナミックな展開も期待したい。

2 関連施設・機関との連携

2-1 博物館ネットワーク計画の推進
実施内容及び自己評価
<ul style="list-style-type: none"> ・博物館ネットワーク計画推進のため、「尾崎弔堂記念館活性化事業」を「尾崎行雄を全国に発信する会」と市民協働事業として実施し、平成 28 年度は尾崎弔堂を紹介する巡回展（4 会場）、著書の輪読会、ゆかりの地ツアー、尾崎ゆかりの里帰り桜の配布の 4 事業を実施し、来場者や参加者にサブコア施設である尾崎弔堂記念館の普及を図った。 ・「吉野宿ふじや」では平成 25 年度から 27 年度までの「ふじの里山くらぶ」との市民協働事業の実績を活かし、平成 28 年度は「吉野宿ふじや活用事業」として、甲州道中と半原宮大工展、蚕の飼育とミウルづくり、藤野の古道と美しいやまなみ展、藤野のおひなさまの 4 本の普及事業を行った。 ・平成 27 年 3 月 31 日で休止となった津久井郷土資料室の収蔵資料の活用として、平成 28 年度から 29 年度にかけて、大量に収蔵されている絵はがきコレクションの巡回展を博物館、尾崎弔堂記念館、南区合同庁舎の 3 会場で開催した。また、郷土資料室保管資料の目録化を行い、一般公開を開始して希望者が閲覧できるようにした。 ・尾崎弔堂記念館及び吉野宿ふじやとの連携した活動として、学芸員を講師として派遣したり、協働で調査などを行った。 ・協働事業としてさまざまな事業を実施することで、津久井地域の施設について市民に広く知っていただくとともに、特に吉野宿ふじやは協働事業開始以前に比べて大幅な入館者の伸びにつながった。
(特記事項)
<ul style="list-style-type: none"> ・巡回展などは一部アンケートを行ったが、展示場所が区切られた空間ではなかったため来場者

<p>数の把握はしていない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・尾崎弔堂記念館活性化事業は会場が尾崎弔堂記念館でない事業も多く、今後は記念館の来場者数の増加を図ることができる事業を検討していくことが課題となっている。
<p>利用者意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・郷土の偉人尾崎弔堂の業績は現在でも非常にためになる考えや言葉が多いので、もっと多くの市民に知らせる方策が必要である。 ・小原宿本陣や吉野宿ふじや等の歴史的建造物や田名向原遺跡、勝坂遺跡等の史跡など市内には貴重な施設や遺跡があるが十分に知れ渡っていないと思われるので、各施設のさらなる周知と連携が図られるような事業を行うことが望まれる。
<p>有識者評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・津久井地域にあった四町との合併を経て、それぞれの地域にあった資料室等の施設が市民協働事業によって市民に周知されることになり、活性化して入館者増につながっていることは喜ばしいが、まだまだ一般への周知が不十分である面が否めない。今後とも、地域の歴史を伝える施設として県内外に継続して広報することはもとより、地域住民の活用や新たな協働事業の展開なども求められる。 ・尾崎記念館をはじめとする諸施設は市の財産・資源として重要なものであるが、例えば維持管理等の課題も多い。今後の限られた予算の中で、こうした施設のあり方について、別に有識者で論議することも有意義なのではないか。

2 関連施設・機関との連携

<p>2-2 学校への学習支援</p>
<p>実施内容及び自己評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小中学校、幼稚園、保育園等へのプラネタリウム番組の学習投影では 11,233 名の観覧者があった。必ず事前に指導主事や学習指導員が利用団体と打ち合わせを行い、スムーズな入場や高い学習効果が得られるように座席の配置や解説の内容等について調整を行っている。また、学校やそれに類する団体への見学対応や中学生の職場体験等も積極的に受け入れた。 ・博物館と学校の連携のあり方を検討する「学校と博物館の連携を進める研究会」(委員・小中学校教員 8 名)では、実物を貸し出して授業で活用する「貸し出しキット」の利用促進に向けて実践研究を行った。また、学芸員や指導主事による出張授業は延べ 27 校に対して実施した。 ・11 月～2 月には、小学校 3～4 年生の社会科学習の単元に併せて館所蔵品を中心とした「学習資料展」を実施し、昔の道具や暮らしを紹介した(延べ観覧者 22,438 名)。また、この展示全体を企画し、列品作業等も担当した市民学芸員による昔の遊び体験「チャレンジ体験コーナー」も行い、延べ 1,351 名の参加を得た。 ・11 月に実施した「学びの収穫祭」では、中学校 1 校、高校 3 校、大学 3 校が各種発表を行い、日常の調査や研究の成果を広く一般市民に知らせる機会を設けた。また、特に自然系の事業では、自然科学系のサークルに所属する高校生に呼びかけて、事業の補佐を依頼した。 ・学習資料展をはじめとする各種の学校への学習支援を例年と同様に実施し、多くの見学者や参加者を得ることができた。特に学習資料展は、小学生の社会科の学習に貢献するとともに幅広い世代にも人気があり、毎年展示を楽しみに訪れる来館者が見られる。 ・中学、高校生が博物館活動に係わることは、博物館の課題である若い世代の利用者を増やすと

ともに、学びの収穫祭での発表の機会を提供することは、自然科学系の部活動が低迷・減少する中で活性化に向けて不可欠な要素である。異なる世代の視点が得られることも、学校教育と生涯学習の垣根を越えて、世代間の学習交流という点で大きな意義を持つことができた。

- ・プラネタリウムの学習投影や学校の校外授業の一環としての展示見学では、博物館利用のマナーや注意点などを学習指導員がガイダンスを行うなど、公共施設利用の教育的な指導も含めて実施しており、学校ごとに異なる人数や見学の時間帯、目的等を勘案し、最大限の学習効果が得られるよう対応した。
- ・講師派遣は 27 年度から伸びているが、特に小学校の「昔の道具や生活」や「蚕を育てる」といった授業への依頼が多くなっており、学校への学習支援の面からも博物館の役割を果たすことができた。

利用者意見

- ・学習資料展での 6～12 歳のアンケート結果では「昔の人の生活」や「生活の中の苦労や工夫」、「現在の生活との違い」等に気付く記述が多く見られた。また、小学校 4 年生の博物館見学を引率した教員へのアンケートでは、学習資料展の展示内容を児童の学習にとって有効だったと 96.2%（回答数 55 校中 52 校）が回答した。
- ・学習資料展のチャレンジ体験では、市民学芸員による関連事業も回数を重ねており、参加者からの感想からも好評を得ていることが窺える。

有識者評価

- ・全体として、博物館に来館者の学習支援を行う教育普及担当の指導主事を配置してさまざまな活動を行うなど、密度の高い状況で学校との連携が実施されていることが大いに評価される。こうした学校の博物館利用に関する成果は教育研究において重要なものであり、その成果を当館だけに留めるのではなく、広く一般にも公開して示していく必要があると思われる。また、合併によって市域に含まれるようになった博物館から遠い位置にある学校も来館できるように、関係部局との連携も重要である。
- ・現場の教員にとって、学習支援に関して指導主事が配置されている博物館に期待するところは大きく、学習資料展は大人から子どもまで幅広い年齢層が興味を持てる内容であるばかりか、特に子どもたちには、学校で学習した内容を補充、深化させ、調べ学習やまとめ学習に大いに参考になっている。また、見るだけでなく、実際に触れ、使ってみる資料があるのは理解がより深まるきっかけとなる。博物館としても小学生が博物館の存在に気付き、慣れ親しむことに繋がっており、今後も内容を充実させて開催していくことが期待される。さらに、学習支援として、資料の貸し出しキットの充実や学芸員等による出張事業等、今後も取り組んでいくことが望まれる。
- ・学びの収穫祭に中学、高校、大学生が係わることは重要であり、展示や口頭発表などさまざまな形式をもとに、未来を担う人材の基礎学力の育成といった点からも評価できる。今後とも、さらなる学校や生徒たちが何らかの形で係わっていけるような支援や呼びかけが求められる。また、学びの収穫祭は開かれた博物館を示す良い機会でもあり、核家族化が進む中で世代間交流は社会的にも重要課題である。博物館でこのような世代間交流を含む活動を行っていることのアピールも必要である。

2 関連施設・機関との連携

2-3 公民館等との連携

実施内容及び自己評価

- ・公民館や環境情報センターなどの各種機関・施設、地域の研究会等で実施された講座や観察会および学校の授業などについて、依頼に応じて講師として総計 80 件の派遣を行った。分野別内訳は、生物 28 件・歴史 32 件・地質 7 件・民俗 7 件・天文 1 件・考古 4 件・自然 1 件で、依頼別内訳は、学校関係 40 件・各種機関施設 24 件・公民館 13 件・他博物館や図書館 3 件である。
- ・依頼内容は、「田名地域の歴史」・「与瀬神社と相模湖地域のお祭りの特徴」・「生きものから見た相模川の魅力」・「相模原の地形と地質」など、地域の文化・歴史・自然に関わるものが多く、相手先からの依頼内容が博物館職員では対応困難な場合にはより適切な機関や講師を紹介するなど、全般的な相談に応じている。
- ・積極的に講師派遣に応じることで、博物館での活動が展示やプラネタリウムだけでないことを多くの市民に伝えることができた。また、それぞれのテーマについて事前の準備が必要だが、そうした準備を通じて学芸員も多くの知識を得ている。

(特記事項)

- ・講師の派遣は、依頼に応じて積極的に行っており、件数はここ数年増加しているが、人員体制や他の業務との兼ね合いもあってこれ以上の大幅な増加は困難な状況にある。
- ・それぞれの施設・機関に個別に対応だけでなく、学びの収穫祭のように成果を発表する機会を提供したり、各施設や機関をつなぐ仕組みを構築したりすることについて、さらに検討を進める必要がある。

利用者意見

- ・講師派遣先で行った受講生へのアンケートでは内容的におおむね好評であり、例えば相模原の地形や地質についてよくわかった、住んでいる地域の身近なことでも知らないことが多く勉強になった、相模原に住んでいて昔のことをいろいろと勉強することができてよかったなど、さらに詳しく話を聞きたいとの要望も多く寄せられた。

有識者評価

- ・博物館の設置目的からも公民館等との連携は重要で、講座講演会参加者数や職員派遣数などにもこれまでの取り組みの成果が現れていて喜ばしい。こうした地域に根ざした活動が博物館のブランド価値を上げ、地域に博物館の役割を知らせて来館者の増加にもつながるもので、継続的に取り組んでいくことが重要である。そして、公民館等の職員などに対して、博物館の利用の仕方などについて研修の機会を設ける等のことも検討したい。
- ・博物館と公民館の相互交流を通じて学習の場が広がることが期待されるとともに、博物館の職員派遣によって公民館に地域の新たな住民が訪れるなど、新しい住民との接点が課題とされる公民館への寄与もできればよいと考えられる。
- ・一方でマンパワーが限られており、準備にそれなりの時間がかかるほか、本来すべき事業に差し障りが出る場合などもある。その点では優先順位の精査や検討を行う必要があるが、せっかくの博物館理解促進の機会を無駄にすべきではないのも当然である。例えば在野の研究者との連携や、内容によってトレーニングを経たボランティアなどの派遣も考えられ、さらに博物館への来館を積極的に促す仕組みを探るなど、さまざまな点から検討を行う必要がある。
- ・公民館以外にも、交流が可能な団体との連携も期待したい。

3 市民との協働による博物館活動の展開

3-1 市民の会の活動の展開

実施内容及び自己評価

- ・博物館ボランティアとして活動している市民の会は、さまざまな分野や目的により結成されており、特に近年は、各分野の会の結成が徐々に増加し、現在は 11 団体が活動している。全体の登録者数は 284 名、年間の延べ参加者数は 2,487 名に及んでいる。
- ・博物館、尾崎弴堂記念館、吉野宿ふじやのそれぞれの施設や地域の特性を活かした情報発信が提案型市民協働事業の枠組みで展開された。協働事業終了後においても継続した協働の在り方で新たに展開しており、地域に根付いた施設の活用が進められている。
- ・日ごろの市民・団体の調査研究成果の発表の場として「学びの収穫祭」を開催しており、高校の自然科学系のサークルや、公民館・環境情報センターなどを拠点として地域の歴史・文化や自然を調査する活動をしている団体とともに、市民の会も日頃の活動を発表している。
- ・博物館の活動全般について、それぞれの市民の会の会員と学芸員との協働で実施していくことが定着しており、資料の調査や収集・整理保管、教育普及、展示など、博物館の基本的な機能を果たすための多様な活動を展開することができた。博物館での運営や事業の推進において、市民の会は無くてはならない力となっている。着実に経験を重ねて資料の収集から展示・教育普及にかけて活動も多様化し、博物館事業の向上的スパイラルとなりつつある。
- ・市民の会の活動は単に博物館事業の活性化に留まらず、知の循環型社会の構築を目指す生涯学習の振興において重要なものと位置付けられるものとなっている。

(特記事項)

- ・会員の固定化や高齢化も進んでおり、過去 3 年間の延べ参加者数の推移は平成 26 年度をピークに減少している。継続的な博物館事業の運営のためには、新規会員の確保や会そのもののあり方の見直しも視野に入れる必要がある。

利用者意見

- ・学芸員とともにさまざまな博物館活動に係わることは、参加者にとっても自らの知的好奇心を満たすとともに、社会貢献や親しい仲間作りといった点からも大変有意義である。
- ・学びの収穫祭は、各グループにとって、自らの活動について客観的な視点で見直すために不可欠となっている。

有識者評価

- ・参加している人数や協働して実施している事業のあり方、発表の場の設定など、ボランティアの知的好奇心が満たされており、生涯学習の理念に十分に叶っているものと評価される。博物館にとっても資料整理や教育普及活動など、市民の会の活動は欠かせないものとなっている。今後とも、各グループが学びの収穫祭等を通じて交流を深めながら、博物館の事業を積極的に推進していくことを期待する。
- ・このようなボランティアの存在をさらに PR し、広く募集すべきである。その反面、市民の会をコーディネートする労力はかなり大きな負担感が生じる。その意味では、ボランティアの数を増加させることとともに、機会を捉えて会そのもののあり方について見直すとともに、ボランティアが活動する際の例えば参加人数や内容・館との係わり方など、多様な観点から評価を行っていくことが必要である。

3 市民との協働による博物館活動の展開

3-2 市民学芸員の活動の展開

実施内容及び自己評価

- ・館の教育普及活動全般に係わる市民学芸員は、現在 33 名が登録しており、平成 28 年度の活動回数は 91 回、活動人員は延べ 785 名を数える。新たな人材の発掘としては、数年に一度募集の機会を設け、博物館の活動等を内容とする研修に参加した上で登録する制度となっている。また、定期的な会合を行って活動内容の確認や意見の調整を図り、館側でも他市の博物館でのボランティア状況の視察をするなどの機会を設けている。
- ・特に 8 月の夏休み期間中に行う常設展示室内のクイズラリーでは企画、設問設定、当日の運営を担当し、2 日間で 766 名の参加者を得た。また、平成 28 年 11 月～29 年 2 月の学習資料展でも、子どもの学習内容に応じたテーマの検討、展示資料選定、ジオラマ製作など展示の設営から撤収、期間中の休日に行うチャレンジ体験コーナーなど、展示や事業の全般にわたり主体的に活動した。さらに、1 月実施の「繭うさぎづくり」においても、参加者に繭うさぎの作り方の指導を行い、200 名の参加者を得た。星空観望会の受付や参加者の整理、学校での出張授業の際の補助など、その活動はさまざまな役割に対応し、一層の広がりを見せている。その活動はすっかり定着して、館の教育普及に関する事業には欠かせない存在となっている。
- ・市民学芸員の活動は、単に館の業務のサポートとしての役割だけではなく、自ら企画し、さまざまなアイデアを出し合って実行するなど、主体性を重視して行われている。近年では市内のいろいろな事物を読み込んだカルタや、子どもたちが使用する学習カード作りなど、それぞれチームを結成して取り組んでいる。

利用者意見

- ・ここ数年の活動で、クイズラリー、学習資料展など、年間の活動の軸が固まってきた。また、そこから派生的に紙芝居の制作など、活動の広がりが出てきている。
- ・活動の幅が広がっている一方、事業費が潤沢ではないため、消耗品や必要グッズなどを要望する声があり、今後の取組みの上では、ボランティア活動としての必要な予算を配慮する必要がある。

有識者評価

- ・市民学芸員は公募による一定の研修を受けた方々であり、他の分野のボランティアグループとは異なる視点を持っている。博物館の学芸業務をサポートすることは大切であるが、それ以上に、博物館を舞台としたエンターテインメント性についても一般市民の視点で企画し、楽しめる博物館を実現することが期待される。
- ・例えば市民学芸員の功労を顕彰することでより一層活動が活性化することも考えられ、また、前項にもあるように他の分野の市民の会と同様に広く PR することが重要である。そして、市民学芸員が公民館や学校からの依頼に対応し、それぞれの得意分野の語り部として活躍の場を広げることも考えられるのではないかと。
- ・ボランティアによる市民の会と市民学芸員との違いは、前者が分野別の専門性に従事し、後者は館の運営業務に携わると捉えられるが両者の違いが他の市民からは分かりにくい。両者の区別の明確化とともに、それぞれの役割を再度整理する必要があるのではないかと。

4 博物館の基礎的な機能を果たすための必要な活動

4-1 市民とともに実施する資料整理及び調査成果の公表

実施内容及び自己評価

- ・博物館に収集・保管している資料は 233,011 点（平成 29 年 3 月 31 日時点）にのぼり、各分野の状況に応じた資料整理、調査研究、展示・教育普及を市民協働で実施している。
- ・資料整理は、博物館で活動する市民の会である「相模原縄文研究会」、「相模原地質研究会」、「相模原植物調査会」、「さがみはら動物標本クラブ」が特定分野である考古・地質・植物・動物資料の整理を実施している。また、「福の会」は、收藏されている民俗・生活資料の再整理や津久井郷土資料室所蔵の民具類の移転に備えた確認作業等を実施したほか、郷土資料室所蔵の膨大で多種にわたる紙資料については、「水曜会」が目録化などの作業を進めている。さらに、天文分野においては、「相模原市立博物館天文クラブ」が天文現象の記録化や写真撮影を行っている。
- ・博物館の業務は多種に及んでおり、特に資料の収集及びその的確な管理を行うための整理作業を学芸員のみで行うことは不可能となっている。一方で、市民が実物資料に実際に触れることについてはやりがい感や満足度が高く、市民の会の活動を継続する上でも大きな意義を有している。
- ・市民の会の重要な役割は資料整理であるがそれに留まらず、例えば相模原縄文研究会では、考古資料の調査や遺跡の発掘調査を協働で実施し、その成果を毎年開催している考古企画展において展示公開まで結び付けるなど、なるべく各分野とも資料に対する作業が博物館全般の活動に係わっていくようなサイクル化された取り組みとなるように図っている。
- ・市民の会やその他、外部の研究者とともに市内外をフィールドとする調査を実施してその成果を『研究報告』に掲載しており、28 年度の『研究報告』では 11 本の論考のうち 7 本が学芸員との共同発表で、市内外の新たなデータを蓄積するとともに、調査研究成果の公開の機会を提供している。『研究報告』は、印刷した冊子を近隣の博物館や図書館に閲覧用として発送するほか、博物館のホームページ上でも公開して、誰でも見ることができるようになっている。

有識者評価

- ・資料調査や整理は、多くの時間と労力を要するものであるが博物館の基本的な機能である。それを市民協働で実施することは、市民の力が発揮される場となり、博物館にとってもメリットが大きく評価される。そして、こうした作業がより円滑に進むためには、達成された成果がどのようなものであるかを示していくことも重要な点と考えられる。実際には難しい面もあるが、多くの市民や若い世代にも分かりやすくアピールすることも検討されたい。
- ・研究報告に市民の活動や調査成果が公開されるのは、専門分野での研究面においても館に寄与していることは明らかである。博物館に収集されている膨大な資料を活用して市民が調査研究を行うことも可能であり、こうした点のサポートを継続して行うことが必要である。そして、例えば「セミの抜け殻調査」や「小正月の団子焼き調査」といった、以前に実施したこともあるような多くの市民に係わって進めていく調査を企画することなども期待したい。
- ・市民ばかりでなく、地域の最新の知見を得ることは博物館や学芸員にとって重要なことは言うまでもなく、今後とも研究に力を入れていくことが重要である。

[評価手法及び評価シート全般に係わる有識者評価]

- ・「実施内容及び自己評価」欄は、内容を簡潔にしてさらに分かりやすくすることを含め、博物館にとって思い通りできなかった点や不十分、あるいは失敗したと感じられることなども記す必要がある。
- ・博物館では多様な事業が展開されているが、こうしたイベントに対する参加者や観覧者の数値について客観的に判断するためには、目標値を定め、それを達成するためにどのような方法を用いて観覧者等を増やすのかなど、目標値の妥当性を含めて十分に検討することが求められ、そうした点を含んだ評価となる必要がある。そして、実際に実施した評価結果を生かし、いかに運営や活動に反映させていくかが重要であるのは言うまでもない。
- ・現代社会の中では、例えば国際化に伴う多言語化や展示の音声ガイド、スマートフォン・タブレットでのさまざまなアプリの活用など、新たな手法の導入が可能となり、また求められるようになっている。もちろん予算面など課題も多いが、それらの活用は学芸員等のマンパワーの負担の軽減にもつながるものであり、可能なところから検討することが望ましい。
- ・相模原市立博物館の特徴とは何かを今一度確認して広く打ち出すべき時期に来ていると思われる。多くの地域博物館がよく似た展示を行い、JAXAとの関係も他市でもそうした展示コーナーが見られる場合がある。一例を挙げるなら、「潤水都市」やJAXAが隣接するという点を取り込んだ愛称を付けるといったことで当館のイメージが伝わり、来館者の増加対策の一つにもなるのではないか。